

生徒指導を良循環に導く日常の組織的取組とその効果について

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
木下 臣 仁

実習責任教員 阿 形 恒 秀
実習指導教員 阪 根 健 二

キーワード: 意味指導, 優しくて厳しい指導, 生徒指導の良循環, 組織的取組, リアリティ

I 課題設定の理由・経緯

1 筆者の課題意識

筆者はこれまでの教職経験の中で、熱意を持って生徒と関わってきたつもりである。しかし、教師の都合による、生徒が「リアリティ」を感じない指導はうまくいかないという実感を持っていた。そこで、河合（1992）が述べている教師が持つ権力の意味を深く考え、学校現場の生徒指導で、教師としての責任を引き受けたうえでの「優しくて厳しい指導」の在り方を考えた。

2 学校アセスメントの概要と学校課題

実習校での勤務経験から、学校課題を端的に言えば、「学力重視の傾向が強く、学習意欲が高い反面、その他の学びに価値を見いだせない」ことだと考える。それゆえに、心の教育を中心とした学びの機会を重視する必要がある。この課題は、アセスメントで分析した各種アンケートや教職員への聞き取り調査によっても明らかにすることができた。

3 先行研究の分析

文部科学省（2010）「生徒指導提要」には、生徒自らが行動の適否について判断し、望ましい行動がとれるようにする指導の重要性が示されている。

また、山下（1999）は、生徒指導の基本的態度、角田（2009）は、規律指導と教育相談の捉え方を述べている。さらに、阿形（2015）は規律指導と教育相談の役割を整理して、組織的な

生徒指導体制との関連から考察することの大切さを指摘している。

先行研究を分析する中で、生徒指導の在り方を教師個人として、学校組織としてどのように捉える必要があるのかを深く考えることができた。ここまでの内容から実践研究課題を次のように設定した。

II 実践の目的

実践研究課題を「生徒指導を良循環に導く日常の組織的取組とその効果について」とし、実習を通して取組を検証することにした。

生徒指導では、全体性・統一性を確保することが難しい。しかし、教職員間において、一定レベルの指導を目指す必要がある。そこで、実習では、次の2点を取組の柱に設定した。

① 意味指導

教育活動の意味を探求し、それを伝える手立てを工夫する。

② 優しくて厳しい指導

教職員間における教育相談と規律指導の調和を図る。

III 実践計画と実践の考察

1 実践計画

実習では、実践の目的（II）を踏まえ、次の5点を取組として計画した。なお、FW I からFW II にかけて取組の内容は修正されているが、取組自体の変更はない。

【主な5つの取組】

- (1) 清掃指導の充実
- (2) 生徒指導通信の発行
- (3) 生徒指導研修会の実施
- (4) 生徒指導記録の作成
- (5) 道徳の授業実践

取組ごとの考察を次に示す。

2 実践の考察

(1) 清掃指導の充実

清掃活動の充実に関する取組では、清掃を行う意味を各学年の集会や全校集会で伝えた。また、3年生の整美委員会を中心とした縦割り清掃を行い、掃除することの意味と方法について生徒が考える機会を提供した。さらに、教職員に対しても活動のねらいが共有できるように、その都度資料を配付して説明した。

縦割り清掃に参加した生徒の感想や教職員の反応から、清掃活動の意味を考える機会が持てたことは一定の成果と言える。しかし、学校全体として清掃活動が充実したとは言い難い現状がある。

(2) 生徒指導通信の発行

学校のあらゆる教育活動の意味を生徒とともに考えるための手立てとして、生徒指導通信を発行した。この取組は、実践研究の柱としている「意味指導」に深く関連する。

月に1～2回程度発行した通信は、「^{えんじ}臙脂通信」と名付け、行事や生徒の状況に合わせて内容を考えた。また、文章を綴る際には、常に「人とのつながり」を意識するようにした。通信の発行を通して、生徒は自分の学校生活を振り返ることができ、教職員は自分の指導の意味を考える機会が持てたようである。学校で何を学ぶ必要があるのかという大きな課題を生徒及び教職員が考えられたことが成果と言える。ただ、内容によっては、生徒が「リアリティ」を感じ

られない場合もあり、その部分が課題である。

(3) 生徒指導研修会の実施

FW I・IIにおいて生徒指導事例検討会を実施し、FW Iのみ実習責任教員の講演による職員研修会を行った。

生徒指導事例検討会では、清掃指導の充実との関連を図った事例を筆者から提供したり、各学年から生徒の現状を踏まえた事例を提供してもらったりして、グループごとで話し合った。教職員は、現実的な視点で話し合い、他の教員の意見を聞く機会が持てたことに価値を見出している様子であった。生徒指導での合意形成を図るためには、教職員間で生徒の姿を想像しながらじっくりと話し合うことが大切である。

職員研修会では、実習責任教員を講師として迎え、「いじめ等の問題をめぐる対策論と人間論」の演題で講演していただき、生徒指導の在り方についての考えを深めた。

講演を聞く中で、教師の指導が生徒の現実から乖離すると問題の解決が困難になる可能性に気付くことができた。また、「赦す」ことをキーワードに、本気で生徒と関わる大切さを改めて実感することができた。

教職員は、普段当たり前のように指導していることの落とし穴に気づき、自分の心に折り合いをつけながら進んでいくことの大切さを実感できたようである。

(4) 生徒指導記録の作成

どの学校でも問題行動や不登校への対応等、実際に行った指導の記録を残しているが、その目的は事実確認であることが多い。そこで、生徒や教師の思いまで記録に残し、指導を振り返る機会を通して、個々の教師の生徒指導観を深めたいと考えた。

実習中は、記録を「生徒指導のヒント」とし

て位置づけ、データ保存するとともに、紙媒体で配布した。教職員は、記録に目を通す中で、自分と違った考えに触れることに意味を感じている様子であった。しかし、一方では、記録の配布のみ終わってしまう場面もあり、活用の仕方が課題である。

(5) 道徳の授業実践

FW I では、「いじめの体験を通して考える人とのつながり」を、FW II では、「SNSの利用を通して考える人とのつながり」をテーマに道徳の授業実践を行った。

FW I では、筆者や芸能人のいじめ体験、あるいは、小説の一場面を教材にするなどして授業展開を工夫した。生徒は、これまでの生活を振り返りながら、「人とのつながり」についての考えを深めることができていた。しかし、伝える内容を盛り込みすぎたことによって、焦点がぼやけ、ストーリー性を欠いたことなどが課題である。

FW II では、インターネット環境が整っている現在とそうでない過去との比較、あるいは現実の世界と仮想世界（SNSやゲーム）を比較する授業展開を考えた。

生徒の多くは、「人とのつながり」には会話が大切という意見を述べた。当然面と向かって人と会話することは大切である。しかし、それ以外のコミュニケーションの方法を否定するのではなく、相手への「思いやり」を基盤にした「人とのつながり」を理解させたいというねらいには到達していないと考える。

授業実践全体のポイントは、「人とのつながり」であるが、指導者側の留意点は、①「リアリティのある学習内容にするために教師が自己開示できる」、②「授業の核になる内容を直接的に生徒に提示せず、核心にせまる」というこ

とである。いずれの内容も難しいが、授業の質を向上させるために、これらの留意点を意識した指導を継続していきたいと考える。

IV 実践の総括

総括は「意味指導」、「優しくて厳しい指導」、「生徒指導の良循環と組織的な生徒指導」の3観点で示していく。

1 意味指導

そもそも「意味指導」という言葉は、筆者の造語であり、教師も生徒も教育活動の意味を探求し、教師側が意味を伝えようとする過程で教職員間の合意形成を図ろうとするものである。つまり、指導する側もされる側も指導の意味が腑に落ちるような指導である。そのような指導によって、教師側の建前で指導することによって現れる「胡散臭さ」や「綺麗事」等を防ぐ効果があるとも考えている。

実習中は、どの取組に関しても「意味指導」を意識して取り組んだが、教職員間の合意形成が図られ、生徒指導の在り方を共有する段階には至らなかった。ただ、教職員間の意思疎通を図るための話し合いが不可欠であることを改めて実感することができた。

2 優しくて厳しい指導

筆者の教職経験の中では、規律指導の側面、言い換えると父性的な役割を学校で担うことが多く、今振り返ると気恥ずかしいが、そういう意味での指導にある程度の自信を持っていた。

山下（1994）は、学校の生徒指導を（狭義）の生徒指導、いわゆる規律指導の側面のみで捉えるのではなく、規律指導と教育相談の両方の立場を尊重し、（広義）の生徒指導について考えていくことの重要性を述べている。この内容は、筆書の課題意識にある「優しくて厳しい指導」という態度でどのように生徒に関わるのか

についての示唆を与えてくれた。

実習中は、生徒指導事例検討会等において、「優しくて厳しい指導」に焦点を当てて話し合う機会があった。教師個人、あるいは教職員全体として、優しさと厳しさをどのレベルで表現する必要があるのかを教員間で深く考えることができた。筆者は、生徒にとっての優しさの意味、あるいは必要な厳しさとは何かを探求しながらの関わりが教師と生徒の関係を築いていくことに、改めて気付くことができた。

3 生徒指導の良循環と組織的な生徒指導

「意味指導」と「優しくて厳しい指導」の観点は、いずれも生徒指導において欠かすことのできないものだと考える。また、双方を切り離して考えたり、合わせて考えたりすることが柔軟な生徒指導を進めるうえで大切である。筆者は、それぞれの指導が機能していくことにより、「生徒指導の良循環」が醸成され、ひいては「組織的な生徒指導」になると考えている。

学校現場では、教師の多忙感によって生徒指導に十分なエネルギーをかけることができない場合もある。筆者も例外ではなく、それが理由で生徒との関係が崩れた経験もある。そうなるのと生徒指導だけではなく、教科指導等、その他の指導にも悪影響が出ることは言うまでもない。逆に言えば、生徒指導を充実させることが他の指導を充実させ、相互に作用することで、良循環が生まれていくと考える。良循環には、教職員間の深いつながりに基づいた協働性が大切であり、それが組織的な生徒指導の基盤になると考える。

実習では、主にこれらの3観点についての考えに基づいて取組を進めてきた。しかし、どの取組に関しても明らかな成果を確認することができなかった。もちろん実践の考察(Ⅲ-2)

でも示したように、部分的に一定の成果は確認できるが、学校全体としての成果は十分とは言えない。そこで、成果を上げるためには教師自身が自分と向き合う作業を通して、指導の妥当性を振り返ろうとする謙虚な姿勢が大切だと考えた。そういう意味で教師個人の生徒指導観、さらに言うと人間性の高まりが必要になる。

V 今後の課題と展望

総括を踏まえ、今後の課題と展望を「生徒との関わり」、「同僚との関わり」の2点に整理して示す。

1 生徒との関わり

これからの生徒指導では、生徒が「リアリティ」を感じ、生徒も教師も腑に落ちるレベルの指導を行うことが課題である。そのために、教師自身が、「教師の建前」、「上から目線」、「胡散臭さ」に陥らないよう、自らの指導がそうならないかを自問自答することが大切である。今後は、生徒の立場に立ちながらも指導者として伝えるべき内容を整理し、伝え方を工夫したい。理想と現実をの双方を大切にしたい指導ができる教師を目指したいと考える。

2 同僚との関わり

生徒指導では、同僚との協働性が課題である。協働性は教員間の信頼関係があって成立する。信頼関係を築くために、まず筆者自身が意識と無意識が統合された状態で謙虚な姿勢を自然な形で表現できるようになりたい。それが人間としての魅力につながり、他者に信頼される人物になるからである。

昨今の学校現場は、日々の仕事の中で思い通りにいかないことも多く、頑張っても心身ともに痛みを伴うこともある。筆者は痛みと向き合いながらも他の教員と一緒にその痛みを分かち合う存在でありたい。